

経済学博士篠原三代平君の『日本経済の成長と循環』・『日本経済の構造と政策』（日本経済研究 篠原三代平著作集Ⅰ・Ⅱ）に対する

授賞審査要旨

各国国民の経済水準向上の過程は経済研究の基本的主題の一つであるが、著者は日本経済についてこの主題を体系的に追求することを、終戦直後から今日まで続けて来た。『日本経済の成長と循環』（篠原三代平著作集Ⅰ）および『日本経済の構造と政策』（篠原三代平著作集Ⅱ）は、長年にわたる日本経済研究論文を体系化したものとして、著者の研究業績の基本をほぼ集約している。

著者の研究は幾つかの方法上の特徴を有するが、この点についてまず挙げねばならぬのは、著者が国民経済計算特に国民所得統計を中心として、年々の国民の経済生活を総括する体系的方法をわが国で撰取活用する仕事に早くより携わり、さらにこれを出発点として、日本経済研究について、客観性・体系的、ならびに国際的比較可能性を高度にもつ方向において、この仕事を広く深く推進展開していることである。

第二に、経済成長は、生産・雇用・物価などの波動をとまなうが、この循環的変動の考察を取り入れることが、その特徴点を成している。この考察において、(a)景気循環の理論（戦前のそれをも含めて）と、(b)これに関する統計的考察の国際的蓄積ならびにその方法の展開とに、著者はたえず留意している。

第三に、こういう成長と循環に対して、(a)通貨量などの貨幣的要因の変化、(b)為替相場、農産物(一次産品)価格、交易条件(貿易上の)、賃金率などの「相對価格」が及ぼす影響——戦後の研究では過度に輕視されてきた影響——を重要視し、終始積極的にこれを分析に取り入れたことも、著者の研究の特徴である。

第四に、実証的研究にとっては事実によって検証すべき仮説としての理論が必要であるが、著者は既成の理論を過度に偏重することを避け、事実を照して、まず現実に働いている多元的にして可變的な諸力に注意し、次にこの諸力のウエイトを秤量し、然るのちそれらの相互關係や發展關係の理論を現実説明の仮説として扱いつつ推理を進める、という行き方を取る。かくて抽象的原理化に墮することなく、よく現実の諸部分を相互に位置づけることができ、また表面的類型化にとどまることなく、よく現実の諸局面を發展の過程としてとらえることに成功している。著者は、「レディーメイドのツールやモデルの中だけで、空まわりし統ける一部の経済学の悪弊」云々と云っているが、それはやや誇張に失するものの、著者の研究の性格をよく物語っている。

以上に特徴づけたような研究態度をもって著者は日本経済を論ずるが、かくて先ず取り上げられるのが成長と循環であり、第一冊の『日本経済の成長と循環』には、四つのテーマ別に編成して既発表十八篇の論文が集められている。

日本経済は戦前も可成りの高成長を遂げているにも拘らず、この事實は看過され勝ちであった。これに対して著者は、この高成長を主題とし、一方では低賃金と労働所得の分配率の低さという事實、他方では輸出の高成長とその背景となる交易条件の悪化傾向および或る時期の円相場下落傾向などに注目しつつ、理論・実証両面から深い研究を進

め、この分野のその後の研究に模範を示した。次に第二次大戦後においては、経済成長に研究の中心がおかれ、循環の存在はむしろ看過され易かったが、これに対して著者は循環の考察に重点をおく。この場合、例えば、設備投資の波、ならびにそれにもとづく景気の波の存在を確信して、統計資料の中にその裏付けを求める著者の態度にはその豊かな学識をうかがいうるし、またわが国におけるクズネツツ・サイクルの発見はその資料探究の丹念さを示している、著者の周到な研究態度が看取される。

次に、戦後日本経済の構造に関連する問題を扱った既発表の論文二十四篇が第二冊『日本経済の構造と政策』に集録されている。

著者はまず、本書の中で、日本経済の特徴と呼ばれる二重構造を取り上げ、その要因を多元的に考察した後、その主要な原因として資本集中仮説を説き、統計資料のゆるす限りこれを詳細に検証している。また、一九六〇年代に進行しつつあった重化学工業化に関連して、この進行が或る段階に達すると、通常これと並んで消費の多様化と「高加工度産業化」の傾向が現われることに注意し、この最近の傾向についても充分立証の労を取っている。ここで扱われているのは主として戦後高度成長期の産業構造問題であるが、以上の考察のうちに構造変化に應ずる政策の問題に対しても著者の研究態度を見ることができよう。なお日本の高貯蓄率に関する先駆的論文が「高貯蓄のメカニズム」の題下に集められて本書の最後におかれているが、これは著者の成長論の多元的思考を示す考察であり、著者の重要な業績の一つである消費性向論の一環を形成している。

著者における日本経済研究の問題構成ならびに問題解決の方法、さらにその業績の概略は以上の如くである。これ

によつて著者は、わが国の日本経済研究の水準の向上に大いに寄与しているし、さらに世界の経済研究に寄与するところも少なくない。